BROADCASTING CREATOR'S ASSOCIATION

放送人の会

NO・15
2003・4・8
発行

〒102－　0094　千代田区紀尾井町1－1　千代田放送会館　3階
TEL & fax　03－3221－0019　E mail　info@hosojin.com
代表幹事　大山　勝美　　編集担当　伊藤雅浩、松尾羊一

2003放送人グランプリ!!

候補者ノミネート締切

第2回放送人グランプリの候補者ノミネートが締め切られました。

このグランプリは、この一年で最も顕著な活動をした放送人に贈られるもので、贈賞は会員のノミネートを土台に選考委員が討論して決められるものです。

選考委員は、テレビ、ラジオ、研究評論、NHK、民放、制作会社、裏方スタッフや地方局、フリーランス、女性スタッフ…などさまざまな要素を全体として広くカバーする目配りと見識が要求されます。

昨年の第一回では、五〇を越えるノミネートを土台にして、川口幹夫（委員長）、磯野恭子、岡崎栄、久野浩平、松尾羊一の五氏が選考にあたり、ご存知の通りの贈賞となりました。

今年の選考委員には、一月の幹事会で、川口幹夫（委員長）、加賀美幸子、木村栄文、堀川とんこう、山崎裕の五氏が決まりました。改めてご紹介するまでもない豪華なメンバーになったと考えています。

時代を見据えた的確な贈賞をすることは、この賞と会そのものの価値を高めることにつながります。

ノミネートされた候補者は現在最終集計と確認をしていますが、選考委員会は四月十一日午後二時半から事務局で開催される予定で、結果は二十九日の幹事会での報告を経て、五月十日の定時総会後、贈賞式が開催されます。放送を考える豊かな時間にしたいと考えています。

第6回総会・懇親会・放送人グランプリ2003贈呈式ご案内

日時　　2003年5月10日（土）
　　午後1時30分～6時
会場　　NHK青山荘　1階大ホール欅（けやき）
　（営団地下鉄表参道下車、A5出口右へ30メートル、稲荷神社右折。徒歩1分）
会費　　3000円

議題　1、川口名誉会長あいさつ
　　2、大山代表幹事あいさつ
　　3、2002年度活動報告・会計報告
　　4、2003年度活動方針・予算案
　　5、幹事の一部異動、会則一部追加、その他

この後「放送人グランプリ2003」贈呈式

懇親会　　午後4時過ぎからの予定　（2次会は"COREDO"）

鵠沼海岸から ⑧ いつもの春のように

名誉顧問　川口幹夫

去年あたりからどうも硝煙の匂いしてきたと思っていたら、遂に戦火が現実のものになってきた。

みんな戦争だけは、もうコリゴリとおもっていた筈なのに、自らの正義がムクムクと頭をもたげてきたようだ。テレビにうつる戦争の実況は願い下げにしたい。

私は六十年前の四月に日本陸軍の最後の現役兵として第十八部隊に入隊した。完全に死を覚悟していた。でも八月十五日に敗戦となって、一命をとりとめてからは、徹底的な非戦主義となった。

ニューヨークのビルに飛行機が自爆する若者たちを見た時、かつての自分たちの姿を見たような気がした。

たとえ正義であろうとも、人を殺すことはやはり許されない。

そう思ってヤキモキしていると、いつの間にか世の中は春になっていた。ことしの冬は厳しかった。湘南という土地でも五度以下の日が何回もあった。「折角、湘南に住んだのに！」と怒ってみても仕方がない。

一月末に沖縄の国立劇場の仕事で那覇に行ったが、何と十八度であった。国立劇場も既に八割方出来ていて、いよいよ来年一月十八日は開場式である。十週間にわたる記念行事を計画するのは楽しかった。

かつて戦場であった沖縄の地に国立劇場が建つ。そこに沖縄伝統の歌や芝居が演じられ、本土からの能や狂言が招かれる。更に中国や韓国や、東南アジアからもユニークな芸能の数々が集まってくる。

戦争より文化だ。

「沖縄に国立劇場を！」と主導したのは小渕首相だった。「平成」という紙を掲げた小渕さんより「沖縄に国立劇場を！」と強く主張した小渕さんの方が私には素晴らしく見える。

琉球石灰岩で桃色に色どられた新劇場は沖縄の新しい名所になるだろう。私が沖縄を飛び立つ日、青い空には白い雲が浮いていた。

沖縄には白い雲と青い空が似合っている。同じようにイラクにはイラクに似合わしいものがある筈だ。

それをお互いに大事にし合うのが人間の生き方だ。

戦争より文化を！しみじみそう思う。桜の便りが聞こえてくる。

戦争の反対語は

大山　勝美

一九九一年の六月イランイラク戦争のさ中、バグダッドとバスラを訪ねたことがある。世界映像祭を開きたい、参加しないかとの招待があったからである。ミサイルが飛んでくるという情報に、日本側の参加者は二〇名足らずであった。夜も煌々とした空港、疾走する車、豊かな水量のチグリス川、眼に触れるすべてが新鮮だったが、街に子供たちの姿をよく見かけた。いちど、子供たちを交えた市民二〇名ほどが国旗をもって「フセイン！フセイン！」と叫びながら踊っている様子をテレビカメラが収めている現場に出会わせた。周囲を屈強な男たち三～四人が「もっと元気よく！」といったような言動で人びとを追い込んでいた。

戦闘の生中継までをとり込んだ今回のイラク戦争はハイテク戦争であり、情報合戦でもある。入り乱れ錯綜する映像のなかで、私たちは意図的に操作されつくられた情報が多いことを知り、自然にメディアリテラシーを学んでいるのではないか。

日本のテレビ放送五〇年の年に、荷厄介な戦争が起こってしまった。正義の戦争でも人は殺され破壊はつづくのだ。「放送人の会」も、テレビ五〇年を迎えて、構えの大きな切り口の鋭い公開シンポジウムを開きたいと願っていても、なかなか心が落ちつかない。会員の方々の御意見、御提言にもっと耳を傾けるべきだと仕切り直しをしている。

それにしても放送人は、厳しい現場でそれぞれにふんばっていて頼もしい。TBSのワシントン支局長の金平茂紀は、超多忙のなかホットな「現場だより」（参照「某月某日　現場発」）をよせてくれた。

金正日総書記が公的式典に姿を見せぬと、やはり気になる。拉致問題では小泉訪朝以前からABCの石高健司は深く時間をかけて追いかけていた。横浜の放送番組センターで開かれた「人と研究シリーズ・岡崎栄」の最終回に顔をだしてみた。岡崎はNHK入局後五〇年目、いまだに現役である。既存にとらわれぬ発想としたたかで柔軟な表現にあらためて脱帽した。

アメリカのイラク攻撃がはじまった三月二〇日、鹿児島の文化イベントの会場で文化庁の寺脇研文化部長の話を聞いた。「戦争の反対語は何だろう？」この質問に会場の子供たちから「平和」の声があがった。寺脇は言った。「平和を唱えるだけで戦争に対抗できるだろうか。私は戦争の反対語は文化だと思う」。その言葉は熱い余韻となって今も私の胸の奥に響いている。繰り返すことによって励まされるいい言葉である。

平成14年度事業委員会報告

事業委員長　今野　勉

「名作の舞台裏」

#3「俺たちの旅」パネリスト・中村雅俊（出演者）斉藤光正（演出）鎌田敏夫（脚本）岡田晋吉（制作）司会・石橋冠。担当・石橋、荻野慶人。

#4「北の国から」パネリスト・田中邦衛・吉岡秀隆・中島朋子（出演者）杉田成道（演出）倉本聰（脚本）司会・石橋冠。コーディネーター・山田良明。担当・石橋、荻野。

#5「阿修羅のごとく」パネリスト・いしだあゆみ・風吹ジュン（出演者）和田勉（演出）司会・石橋冠。担当・石橋、荻野。

（日時　#3＝7・13．#4＝11・25．#5＝03・3・15。場所はいずれも横浜情報文化センター情文ホール）

「放送人の世界」#5

「岡崎栄、人と作品～ドラマとドキュメンタリーの間」

①03・3・9。上映作品「天下御免」「天と地と」（ドラマ）

②3・16。「パパ行ってらっしゃい」「かぎりなくやさしい日々のために」（ドキュメンタリー・ドラマ）

③3・23。「命　愛してやまず」（ドキュメンタリー・ドラマ）

「放送人の証言」（別掲）

「InterBee2002シンポジウム」

#5「ミレニアムの放送～私が創る『時代・劇』～」

パネリスト：能村庸一（フジ・P）浅野加寿子（NHK・P）小川治（テレビ東京・P）石橋冠（D）。司会・今野勉。コーディネーター・斉明寺以玖子。

「全国"ふだんの番組"フォーラム2002」～ローカルの知恵は無尽蔵～

司会・田原茂行。担当田原、石井清司。7・16。於　情文ホール。

その他

日本放送芸術学会と共済シンポジウム「テレビ開局50周年～テレビ放送への熱き想い～」10・5。司会・大山勝美。担当大山。

「放送人の世界」岡崎栄、人と作品～ドラマとドキュメンタリーの間・第3回の会場スナップ

3回にわたる演出家を囲む作品研究は、裏話や苦心談のレベルを越え、ジャーナアカデミズム（造語）映像研究の領域を示唆する充実したイベントだった。会場は横浜・放送ライブラリー映像ホール。　写真：（左から）今野勉氏（コーディネーター）　中央　鈴木嘉一氏（読売新聞）　その左が岡崎栄氏。　会場の参加者は熱心にメモをとっている。

連載 **放送人の証言** 久野浩平

（その一） 放送界 夜明けの人びと

収録された『放送人の証言』の内容を毎号順次ご紹介していくことにしました。本来なら貴重な「証言」をお一人づつ完全に起こしたいのですが、会報のスペースでは余裕はありません。

そこで各人に共通するテーマ性を見いだすことで、「証言」のもつ世界を立体的に展望する方法をとりました。

第一回は、敗戦直後、占領下の時代。当時内幸町にあったNHK放送会館には米軍のCIEが常駐して放送の監督指導に当たっていました。そんな状況を体験した「証言」を集めてみることにじます。

西澤實さん の証言…「会館の偶数階にアメリカがいるんですよ。だから犬と日本人は偶数階に行っちゃいけないんですよ。そういう時代だった（中略）僅かに2階の一番うしろにアナウンスの部屋があった。この先は行き止まりの所ね。それから4階はもうCIE全部（中略）あとはスタジオです」

トラック島から復員してきた西澤さんは、そんな中で放送作家としてのスタートを切りました。CIEの担当者は三十代の女性でした。日本人を軽蔑してる意地悪なリンゼイ嬢の思い出。その後任で今度は物分かりのよいホスキンス嬢の協力でその後、24年間続くことになる学校番組『マイクの旅』が生まれます。西澤さんの「証言」はさらに『架空実況放送中継』（関ヶ原合戦など）をはじめとするラジオドラマ論が延々6時間にも及ぶのでした。

当時そのCIEラジオ課員であり、NHKとの交渉の実務者だった人が二世の フランク・馬場 さん。「証言」によれば馬場さんは、放送は「聞かせる」のではなく「聞いてもらう」ものであり、正確に、時間どおりに進行しなくちゃいけないと、アメリカ流の放送システムをNHKに教えたのです。アメリカの人気番組を次々に紹介し、番組化します。『二十の扉』『話の泉』『のど自慢』『放送討論会』などの番組を権力（日本政府）の攻撃から守ったのも馬場さんでした。

「すごいプレッシャー。古垣（鉄郎）さん(87・3・8没)にあらゆる方面から圧力がかかる。僕はね、こういうナニ(番組は)は、(民衆の)鬱憤ばらしでね、現在の日本国民には必要なんだ、だから止めちゃいかんと思った。だからアメリカに僕がかけ合い、続けましたがね、帰ったら数カ月でダメになりましたね」。『日曜娯楽版』放送中止の裏にあった官僚的自主規制については西澤さんも「証言」で触れています。

フランク・馬場さんの証言はそのあと、民間放送の設立計画にふれて行きます。馬場さんが日本に移植したアメリカの人気番組を実際に翻訳したのは、当時馬場さんの部下でCIEの、職員だった 高橋太一郎 さんでした。

高橋さんはその後、TBSのチーフディレクターとして『日真名氏とび出す』などを制作しました。残念なことに、この「証言」を収録して約一年後に亡くなりました。高橋さんによれば

「このフランク・馬場というのはね、僕の上司で兄貴みたいなものなんだよ。（中略）僕の仕事はね、翻訳に通訳、翻訳がメインだけどね」。高橋さんの翻訳は放送法にまで及ぶことになります。「昭和23年から24年にかけてだろうな、馬場さんが僕のところにね、うすっぺらなパンフレットを持ってきてね、ブルーブックといって薄いパンフレットなんだ。それを見たらね、放送の基準が全部書いてあるの、僕は気に入ったから一生懸命翻訳してね（中略）しかし実際の（戦後）日本放送史にはCIEの（基準）をそのまま採用したとは書いてないよ。アメリカのラジオコードなどを参考にしたうんぬんなんて書いてある。本当はアルバイトの俺が訳したのをそのまま採用したんだから」

昭和22年当時はNHK職員になっていた 堀江史朗 さんは、BKからAKに転勤になります。

「進駐軍命令だと言われました」

堀江さんは、CIEのベルナール・クーパーの指示で『ラジオ小劇場』をスタートさせます。新派劇中心の日本のラジオドラマに新しい流れをつくる実験的な試みでした。内村直也さん、小山祐士さん、田中澄江さんなどの劇作家たちがこの番組で仕事をすることになりました。

堀江さんの3時間にわたる「証言」は日本のラジオドラマ史と重なる貴重な記録ですが、そろそろ紙数が尽きてきました。

この時代の「証言」としては他にも藤倉修一 さん、長沢泰治 さんなど収録済みの証言が数多くあります。視点を変えて順次ご紹介してゆくことに致します。以上紹介した「証言」も豊富な内容のほんの一部分に触れただけです。事務局担当の会員の皆さんの努力で「証言」のVHSテープへの転換はほぼ完了しました。「証言」の内容をもっと詳しく知りたいと興味をお持ちの会員は事務局に連絡の上、全体像をご視聴くださるよう、お薦めいたします。

••••••••••••••••

平成之世間胸算用 一茶篇

かしましや江戸見た雁の帰り様

（解）江戸は（テレビは）楽しかった、青春だったと老雁たちの感慨

我が里はどうかすんでもいびつなり

（解）たまに昔の職場をたずねるが視聴率低迷ゆえか元気がない。憂れいて詠める愛社精神がいじらしい

むきむきに蛙のいとこはとこ哉

（解）歴戦の勇士、幹事会で昔の敵は今日の友と、むきむきにテーブルにつくさまが蛙に似て可愛らしい

蝶とんで我が身も塵の類い哉

（解）後輩がド派手に作る番組を見てふと感じる孤独感を塵に託す心境

此のやうな末世を櫻だらけ哉

（解）孫を連れ土手桜を愛でるのだが、イヤホーンのラジオから漏れるイラク情勢に暗澹の心地。櫻の木の下に屍体を窺ふを嘆ずる翁。

あなただ斯う生きて居るも不思議ぞ花の陰

（解）余計な解説は不要であろう

テレビ50年 わたしの証言

『木島則夫ハプニングショー』

岸田 功

21世紀までは生きない、と思っていたのでこの話は墓場まで持って行くつもりだったが、主な関係者は亡くなり、裏話を書くことにした。

当時、世間を騒がせ、毀誉褒貶かまびすしかった『木島則夫ハプニングショー』(日本テレビ 土曜22・30～23・30、68年)のことである。

その前年の秋、新設の企画部の部長プロデューサーとして特別番組『日ソ50年』の制作中だった私の所へ、旧知の万年社のO君が木島則夫をNETから引き抜く話を持ち込んで来た。スポンサーのヴィックスの意向だという。1964年にワイドショーのパイオニア『木島則夫モーニングショー』を創案したのは日本ヴィックス社のピーターソン社長だということは業界の常識で、彼は戦後の占領軍のCIAスタッフだったというわさもあったほどの辣腕の主であった。私としては木島本人よりも、高い人気の『木島モーニングショー』を潰せるのが魅力だった。

話は進んで、木島の年間契約金2千万円は日本テレビと万年社が半分ずつ持ち、その代わり万年社は新番組の広告販売権を持つことになった。

5月18日の第一回「何か面白いことないか」は、福田陽一郎の企画・演出、阿久悠の構成。ドラマ『男嫌い』で名を挙げた演出家福田にとって生中継は多分初体験だったろうし、当時の漆戸靖治編成課長をして「岸田さんと陽ちゃんが組んだらどうなっちゃうんだ?」と叫ばせた初コンビだった。事実、この番組は芸能局、報道局、社会教養局を横断するスタッフ体制で、異質の才能の衝突こそ文化を創るという気概に満ちていた。

台本のない出たとこ勝負の番組なので、何週か前の同時刻に、木島にマイクを持たせて、新宿コマ劇場前で若者たちに街頭インタビューを試みたが、木島則夫など誰も知らない風で全く無視された。そこで急遽、当日の夕刊3紙に、新番組紹介を兼ねて「今夜10時半 新宿歌舞伎町に集まれ!」という半五段広告を載せることにした。

しかし、あの3千人の群衆は新聞広告のせいではない。したたかな新宿の若者たちは、木島やテレビを無視するふりをしていたのだ。生本番の直前、コマ劇場の屋上のライトが明々と照らされると、集蛾灯の蛾のように若者たちは広場の真ん中にいる木島とカメラマンに殺到した。

「君たちにとって面白いことって何?」と問う予定の木島に向かって、若者たちは「こんな面白いことはない」とわっしょいわっしょい、押しくらまんじゅうを始めたのである。かくてこの新番組は、オープニングの挨拶も何もなく「危ない、危ない!」「押さないでください!」の木島の絶叫で始まった。

私にとってこれはハプニングではなかった。ライトを消せば群衆は散ることはわかっていた。私が恐れたのは番組を中止してしまうことだった。

広場にいた私はすぐ中継車に行き、このまま続行を伝えたが、福田ディレクターは「当然」という顔をしていた。やがて広場いっぱいにゴーゴーを流し、群衆は踊りだした。東宝パーラーに逃げこんだ木島にとってはハプニングだったのだろうか。しかしこの番組は企画当初から「司会者には知らせない仕掛け」『ディレクターの知らない仕掛け』「カメラマンに言わない仕掛け」などを議論していた。だから木島の慌てぶりも実は半ば演技だったろう。

私にとってハプニングだったのは、もの30分も経たないうちに、群衆を囲んで何本もの高張り提灯が高々と掲げられたことである。提灯には数字の4。60年安保闘争以来、泣く子も黙ると恐れられた警視庁第4機動隊の出動であった。「早い!」私は舌を巻いた。

終わる時間が来てライトが消えるとウソのように人波は去った。私は毎日新聞の記者に取材された。話したあと、年齢を聞かれたので驚いた。社会部だナと思った。警察の次に社会部の記者は付き物である。翌朝の各紙社会面は、今も変わらぬ警察(権力)の眼で、大々的に報じ、マクルーハンの「ハプニング」概念は一夜にして常識語となった。

ピーターソンは満足げだったが、既成の評論家たちは周章狼狽、「失敗だったが、期待する」といった調子で、支離滅裂な論理が多かった。中には「バカ騒ぎよりも、暗がりで女の子にナンパしていたシーンの方が真実性があった」という批評があり、笑ってしまった。胸にワイヤレスマイクを忍ばせて〝ハント〟を待つオトリの女の子〟の設定は、阿久悠の第一稿に書かれた仕掛けだったのだから。放送評論家とはその程度のものだった。

『木島則夫ハプニングショー』が意図していたのは、テレビの異化作用だった。異化はカタルシスを追放し、認識を楽しみにする。観客を番組に同化させない。番組の新聞広告のコピー、「映画よさようなら、ハプニング今日は」の意味もそこにあった。

異化はテレビの虚構に気づき、虚にこだわり続けてきたテレビ人の思想であった。劇や劇的なるものの同化作用を利用したヒトラーに反発して、異化劇を考案したブレヒトの思想でもあった。

日本にも戦争をあおったラジオの痛恨の歴史がある。そして木島則夫は、多数の善男善女を同化させてきたタレントであった。むろん木島もそれに気づき、NHKからの脱皮に努力した。しかし彼には次の目標、参議院選挙があった。そこで頼りにするのはその善男善女たちしかなかったのである。

(元NTV・P、元文教大教授)

寄稿 歓迎! TV50年史的な番組の周辺の記憶を記録しませんか

ラジオの広場

放送人の会
ラジオ委員会
『平成ラジオ塾』
＝原稿 到着順＝

ラジオは発想の原点

木村成忠

4月1日付きでラジオ局長から東京支社長に転じました。入社以来営業7年、制作27年、ラジオ畑一筋に歩いてきました。この間、企画制作に当たった作品は、ドキュメンタリーを中心に18本。幸い芸術作品賞をはじめ民放連賞最優秀賞、放送文化基金賞など11本の受賞を果たすことができました。

受賞作品中、思い出に残るのは『丸正事件冤罪の叫び』（S54年）。これはじめての作品だったので、苦労の多かった分、喜びもひとしおでした。

また、長期取材を掛けた『八人目のサムライ～作曲家早坂文雄の生涯～』は、『七人のは侍』ほか多くの黒沢作品の音楽を手掛けた郷土出身の夭折の天才作曲家を描いたものですが、自分が映画好きなだけに感慨深いものがあります。近作では、プロデューサーとして後進を指導しつつ制作した『秘められた十字架～唱歌百二十年の謎』（H12年）です。

実は営業時代、同期入社の社員たちが制作活動をしているのを羨ましく思い、自分も何とか一度は番組を作りたいと熱望していました。今後はラジオ制作の現場を離れ、あらゆる業務に専念しなければなりません。

私の場合、放送の発想の原点がラジオにあります。ラジオへの熱い思いを抱きつづけながら前進したいと念願しております。

（会員　東北放送東京支社長）

再びラジオです

石黒一成

3月の機構改革でわが社に「ラジオセンター」が新設され、約3年ぶりでラジオの現場へ戻って来ました。番組制作、編成、企画、広報と、ラジオに関するあらゆる業務が新集団の守備範囲になりました。

残念ながらわが社の売上は、ピーク時の3分の2以下に落ちています。

聴取率が悪化したわけでも、媒体価値が暴落したとも思えないのに、です。ラ・テ兼営局では、どうしても規模の大きいテレビに目が向いてしまう傾向があります。知らず知らずのうちに、『ラジオを愛し、ラジオのことを本気で考える人と時間』が、激減しているように思います。私自身も含めて、多くのスタッフが〝兼務病〟に陥ってしまったと言われても仕方ありません。

ラジオはPR不足、データ不足が指摘されています。ラジオらしい〝新企画〟、〝新商品〟の開発が求められています。ラジオがもう一度、人の話題に上るようになるためには、何が必要なのでしょうか？ 皆さんのお知恵を拝借させてください。

昨年の開局50周年事業の中で、開局直後の諸先輩の苦労話をよく耳にしました。そして、それらの苦労はひとえにラジオを愛してもらうことから始まったのだと改めて感じました。半世紀経った今、再び愛される努力から始めようと思います。

（北日本放送ラジオセンター長）

JRN九州・沖縄ラジオ局の現状

湯浅和憲

（1）ラジオの採算性を求められる各局…九州・沖縄の殆どのAMラジオ局は売上げ減少傾向が続き、「ラジオサイジング」「ラジオサバイバル」「ラジオカンパニー」などと名称がつけられ、「ラジオ単独の収支」が厳しく求められる時代を迎えています。この兆候は5年位前から現れていましたが、本年4月からは、各局でそれぞれの経費削減の方策が講じられそうな情勢です。

九州・沖縄の各局で今進んでいるのは社員Dのプロデューサー化、契約Dの導入です。宮崎放送では部長以下3名の社員Pの下に、契約D6名、契約AD2名の制作体制が作られています。

また、営業数字が優先する傾向も当然ながら強まり、ラジオショップは増加する勢いです。現在、ワイド番組の中には番組の体裁を維持できるギリギリの限界範囲（1時間以内には1ラジオショップ）までラジオショップが入りこんでいます。

（2）AMラジオ回帰の予感はある…AMラジオの売上げ減少とは逆の現象ですが、21世紀を迎えた頃からライフスタイルを見直す価値観が台頭し始めたような気がします。「スローライフ」「スローフード」は「氾濫する映像や音の世界」からの脱却を人びとが求め初めた兆候ではないでしょうか？

日本では78年前に誕生したAMラジオですが、そのラジオは一貫して「ジャーナリズム機能」と「メディア文化」の担い手としての役割を果たしてきましたが、マルチメディア時代においても、ラジオの果たすべき任務は少なくないと考えます。これからも私たちは九州・沖縄の制作者の方々とAMラジオのありかたを模索して行きます。

（宮崎放送・ラジオ局次長）

〝雑感〟

鈴木典之

マスコミ界を退いた老友たちの酒席で、しばしばラジオが話題になる。自適の日々の、とりわけ目覚め時の無聊や焦燥が、ラジオで慰められるという。よく耳にする話だが、身近かな、現役時代の荒っぽさも熟知する連中に口を揃えられると、意外な感が強い。

この十数年、もっぱらテレビを論じてきたので、足元をすくわれた来もする。が、「テレビはうっとうしくなったが、ラジオだと自分の世界に浸れる」などと、各人哲学めいたいわれると、

永年の自説が認められたようで、内心はうれしい。

ラジオは大人の媒体で、発することばに力があれば、若い層だって耳を傾ける筈なのだ。「シルバー」がメイン・ターゲットなのではなく、送り手が安易に流れ、的を外していた――近頃の、ルネッサンスの動きはその反省だろう。

経営状況は厳しいが、それゆえに独りよがりな迎合は、リスナーにあきられている。テレビを見下していたラジオ現場の、古いDNAが身体の芯に残っているせいか、核心はことばのオーラの響き合いだという信仰が消えない。テレビが試練を迎えている今こそ、小回りを利かせ、機動性を活かして、ラジオ再興に先手を打つ〃天の時〃とすべきだろう。

（会員）

赤いラジオ

山県昭彦

昔、「赤いラジオ」という受信機があった。

ラジオがテレビのの進出に押され、なんとか巻き返しを図りたいと、ラジオ・ルネッサンスの雄叫びを挙げた時期だ。この運動のシンボル・アイテムとして関係者に配られたのが、赤いラジオなのである。

正直言って困った。郵便小包が届くと赤いラジオ。ラジオ会社や代理店へ行っても、お土産に赤いラジオ。高さ10何センチだったか、横幅30何センチだったか。何処へ置くにも場所をとる。プラスチック材なのですぐに埃をかぶる。どうにも我慢ならないのが、きわめて音質よからぬこと。他人に差し上げるわけにもいかない。

発祥の地アメリカでは関係者がこの受信機を胸に抱き、「ラジオ！ラジオ！」と叫びつつ目抜き通りを行進したらしい。オマケに抱いたラジオもガンガン鳴らしながらだったというから、さぞかし人目を惹いたことだろう。プラカードさえ掲げればたった一人でもデモになるという、いかにもこの国らしい発想である。

日本ではそんなイベントも無く、受信機だけがヤミクモに配られてしまったから、貰い手は困った、困ったと処分するのが落ちだった。もったいない話だ。ここには放送が金儲けの道具であると信じられていた、時代の名残をうかがえるように思う。

しかし時代は変わったのである。ラジオであるとテレビであると、金儲けが第一義の仕事なんて無くなってしまったのだ。では金儲けに代わる現場人間の支えとは何か。たぶん会社への忠誠心などではなく、自分の仕事への忠誠心ではないだろうか。「志」と言い換えてもいいかもしれない。

それにしてもあの日の赤いラジオ的発想は、今なお辺りに生き続けているかに見える。ラジオ委員会の出発に際し、あらためてそんなことを考えている。（擁成作家平成ラジオ塾代表幹事）

先人の知恵を見つめる

児玉久男

使い古された言葉ですが、「温故知新」の意味の重さを、いまさらながらに噛み締める毎日です。

民放ラジオ局も開局50年の節目を迎えています。半世紀といえば物事が進化を遂げるには十分な時間です。「果たしてラジオは50年なりの進化をしたのだろうか」と振り返ったとき、焦りに似た衝動を覚えてしまうのです。

確かに録音機材、スタジオ機能などハード面は向上してきましたがソフト面ではどうでしょうか。50年分の制作ノウハウが蓄積され、継承されているでしょうか。各局に話を聞くと、それぞれにエアポケット状態の時代があり、うまく継承されているとはいいがたいのが実情のようです。

ラジオの制作能力を高めようと模索した結果、行き着いた先が「先人たちの知恵」でした。工夫に工夫を重ねた制作手法が、実はラジオ全盛期に既に確立された手法だったことが多いのです。「芯」になる部分は何年経とうが変わることはありません。これに思い至ってここ数年が勝負と、ノウハウを蓄積した先人たちに「お知恵拝借」し、後輩たちへ引き継いでいます。

開局50年は再生の波と位置づけています。民放は「売れることが正義」ですが、質の高い商品を作ることが制作者の良心とプライドであると信じます。

（山梨放送 ラジオ制作部長）

ラジオ曼陀羅

◆戦前や戦後の早い時期まで、ラジオはラヂオと記されていた。三谷幸喜も自作映画の題名を『ラヂオの時間』とした。ではラジオとラヂオは、どう違うのか。

◆リュミエール兄弟がシネマトグラフ（後の映画）を発明したのが1895年。明治22年、浅草に透視画を応用した長大な風景画を窓から見る装置のヂオラマ館が生まれた。「浪子はよよと泣き崩れ…」、アレである。1822年にフランス人のダゲールが発明したヂオラマは、活動写真が進出すると忽ち滅んだ。しかしヂオラマには祭文ふうな物悲しい語りによって人々の心を誘うものがあった。耳にレシーバーを当てる初期ラヂオにも〃ラヂオラマ〃的な甘美な音声世界を夢想する何かがあったのだろう。

◆最近はイラク報道もあって『ラジオ深夜便』ではなく、枕元の携帯ラジオのイヤホーンで、テレビの1チャンネルの「音声」を聴くことが多くなった。砲撃音をバックに現地特派員のリアルタイムな報告が入ってくるからだ。暗闇の寝室で世界の修羅に触れる、その言い知れぬ孤独感。

これはテレビでは味わえぬ、まさに「ラヂオ」なのである。いまラジオが求められてるのは、この〃ラヂオラマな〃世界なのかもしれない。

（Y生）

南船北馬

テレビ五十年を迎えて思う

松本　明

世の中はデフレの渦中にあるが、私は戦後五十年右肩上がり経済の真っ只中で生活し仕事をしてきた。

昔の大恐慌も知識としては知っていても実感のない世代。現金はインフレで価値が下がるので、株や土地、家屋、ゴルフ会員権を購入して定期預金など見向きもせず、お金は物に替えてきた。

ペイオフなどと言われても、預金もないから余所事だった。銀行が潰れようがそれ程気にかけなかったが、その波紋は瞬く間に拡がり、ふと気が付いてみると、株と土地は十分の一以下に、何億もしていたゴルフ会員権は、すべて只の紙切れと化した。今や自分が、文無しの素浪人で何の財産もない事を思い知らされる破目となった。

銀行は担保があっても六十五歳以上の高齢者には金も貸してくれなくなった。

つい先日迄、何時自分が亡くなっても、ゴルフの会員権を売れば、相続税を払って、妻子は当分生活出来るとタカを括っていた。

えらいご時世になったもんだ。宝くじでも当てて、現金を抱いて寝るしかない。

菊田一夫さんの「がめつい奴」の感覚が、本当には判っていなかった自分の愚かさに今頃気付いても遅かりし由良之助である。

とりあえず宝くじを購入する金を稼がねば！

贅沢言わずに仕事をしなきゃ仕様がない。

思うにテレビも同じ運勢を辿っているのではなかろうか。

特に若い人達のテレビ離れは顕著である。

世界の情勢、日朝関係の雲行きも険悪である。環境汚染で自然破壊も取り返しのつかない所まで来ているのではないか？

四十六年間テレビの仕事をして来たが、テレビの先行きもなかなか読めない。一体どうなっていくのか。日常的に起こる事件、事実は、小説も、テレビドラマも遥かに越えてしまった。

とりあえず、去年の税金の支払いを分割払いにして貰って、時代に遅れを取らぬよう頑張っていくしかない。頼れるのは自分の腕と頭脳と健康のみという寒い現実に泡を喰っている今日この頃である。

（㈱エープロオフィス）

中川一政画伯とゴッホ

高橋　一郎

〝押入れで作者不詳の絵を見つけ〟作者不詳の農婦像がゴッホの作品と鑑定され六千六百万円で落札されて話題となった折、東京新聞の投稿川柳欄に掲載された一句である。このオークションは故・中川一政画伯所蔵のコレクションを対象に催されたのだが、中川画伯とゴッホには忘れられない想い出がある。

私がTBS演出部先輩の中川晴之助さん（画伯の次男である）のプロデュースで、中川画伯のドキュメンタリーを制作したのは1989年だが、九ヵ月間撮影に真鶴のアトリエに通い、画伯の謦咳に接する事が出来たのは実に幸運だった。九十七歳の画伯は殆ど毎日アトリエで薔薇を描いておられた。独学独歩で自分の世界を切り拓いた中川画伯が、若い頃指針とした画家は自分と同様に美術学校を出ていないゴッホやセザンヌであった。

画伯が二十二歳の時の絵に「霜のとける道」がある。この絵が展覧会で入賞し画家への道を進むキッカケとなったが、当時の画伯は貧乏でキャンバスが買えず、潰す絵も無くなって、とうとう岡本一平に貰った絵を潰し、その上に描いたのである。この事実は後年出版された『腹の虫』で明らかにされた。以下は中川画伯と私との応答である。

Q「あくまで仮定の話ですが、今描きたい題材があるのにキャンバスが無い場合、たまたま其処にゴッホの絵があれば、それを潰してお描きになるでしょうか？」

A「やりかねないよ、それは。多分潰して描くと思う」

Q「これも仮定の話になりますが、同様に中川先生の絵を潰して、その上に若い画家が描く事も起こりうると思うのですが？」

A「僕の絵より良ければしようがないよ」

閘じ日の投稿川柳欄の〝受像機の中身も薄くなり五十年〟これには胸を衝かれる思いがした。さんもそういっていたという。

地域狙い撃ち

石井　清司

東京生まれなので旅が面白くてたまらない。地域局のみなと会い、土地の香りを嗅ぐ。

最近は二泊三日で七局、松山、長

崎、広島、岡山と歩いた。前回は鹿児島、熊本、その前が青森。五系列それぞれ〃系列〃カラーがある。結束が固かったり、人情が厚かったり、独立独歩だったり。社長の人柄がその局のカラーになっているところなどテレビ局の〃人間臭さ〃がいい。発見と楽しみのミステリアスでパズル解きのような地域局探訪をつづけている。どこかに今のテレビ状況解きのカギがある、と信じて。とつぜんどこかの局をノックするときの初見の新鮮さがいい。これからも予見なしで〃テレビ新発見の旅〃を試みたい。

人生、一本の線で考える

村上　佑二

馬齢を重ねた今になって皮肉にも最先端技術に挑戦中です。3DHVによる展示映像を作っています。南船北馬のスケールこそありませんが、四季を追って右往左往の一年間でした。乗り飽きた新幹線の流れる文字ニュースは、イラク、北朝鮮、経済危機に贈収賄、はたまた殺人、不倫にセクハラetcと地球上は大変だ。実はわが仕事も大変なのです。常設シアターで上映するソフトは、450インチ立体HVに加えて6・1サラウンド。座席はボディーソニックで音響に反応、耳元にはピロウスピーカー、さらにはシアターの壁面に場内照明を仕込むという具合…。

これをハードディスクの信号で同期させるわけだから面倒この上なし。身の回りはすべてデジタル世界とあって、コンテンツはアナログ感覚で終始しようと決めました。

今想うに、あらためて放送人に求められているのは、0と1でつなぎ合わせる便利な世界観ではなく、ヨレながらも一本の線の上を走る不便さを含んだ世界観を表現することではないかと思うのです。

毛利衛さんの話……「宇宙飛行士の訓練は殆どがコンピューターで行われます。起こり得る事故を想定して、いかに危機に対処するか、つまりシミュレーションだから、たとえ失敗しても命に別状はない。本当の意味での緊張感や危機感は生まれません。だからアメリカでは、宇宙飛行士はジェット機に乗る訓練をする。緊張感や恐怖を身をもって実際に体験するのです」と。

大なり小なり、現代はコンピューターと無縁では生きられません。TVゲームは殴る蹴る倒すが当たり前だが血は流れない。湾岸戦争の報道はTVゲームさながらに人の顔や悲惨、生活が見えてこない遠景でしかなかった。臨場感や恐怖感が伝わってこないのです。では、今映画は？われわれのブラウン管は？人生、不便ながら一本の線の上で考えたいナ、と想いつつ…。（NHKドラマOB）

「いま」に向かって

藤井　潔

『この道は　一本きりか　秋の暮れ』
深作　欣二

深作さんが逝かれた。先に開高健さんをを失った。愈々厳しい。親しくして戴き、敬愛したお二人。お二人とも死の瞬間まで、仕事に全力で打ち込み、或いは「珠玉」、或いは「バトルロワイヤル」。そう言えば牛山純一さんもそうだった。

二年前からか、心の臓やら、何やらの臓やら、長年のツケが噴き出し、身動きも儘ならぬ身から思うと、勝手ながら、最後まで仕事の場におられた方は羨ましい。「戦死」である。皎ぶべくもないが、後方の野戦病院送り、消えてゆく雲をぼんやり眺めてのずるずるの日、たまりませんなあ、木村栄文さん、如何でしょうか。

『あかあかと　日はつれなくも
秋の風』　芭蕉

子規は「墨汁一滴」のの中で、「希望の縮小」について記している。

シーツが血で汚れる最後の日々。子規は願う。庭先でも歩ければなあ。いや座っていられれば。いやいや、穏やかに床に臥すことが出来ればいい――希望が次第に縮小し、冷え込み、遂に「希望零の日」が来る。

「その日を釈迦は涅槃といい、耶蘇は救いという」と結んでいる。

が、はてさて。

放送人の会、過去を残し、検証することは極めて大切なことだ。欧米のアーカイブスをやっている人たちは、「過去は未来を映す鏡だ」と強く断言する。

それは、「いま」に向かって発言することだと思う。いまのテレビ情況に向かって、いま悩んでいる制作者に代わって、これでいいのかと大声を挙げて戴きたいと願っていた。放送人の会の軸となる魂だと勝手に思い込んでいた。いい時代にテレビという仕事をお釣りが来るくらいに楽しませて貰ったのだから。失うものはもうないのだから。　失礼。

今本当に思っていること

山根　基世

何事においてもノロマな私が放送の仕事の本当の面白さに気づいたのは40歳を過ぎてからだった。

それまでの私は、恥ずかしながらいかに上手に「聞き、話し、読み、司会し、中継する」ことができるか、その達成感に生き甲斐を感じていたような気がする。

４０歳も過ぎたある時、あるきっかけで「組織の壁、男社会の壁」なるものに、したたかにぶち当たった。このとき味わった痛みが私を目覚めさせてくれ、放送の中で「何を伝えるべきなのか」を理解させてくれた。この時初めて「放送人」としての自覚が本当に自分のものになったといえるのかもしれない。

直接的なメッセージではなくとも、痛みを感じている人の思いや、美しい生き方をしている人の志や、何が美しくて何が醜いのかという美的価値などを、まっすぐに伝え続けることによって、いつかいつの日にか、漢方薬が効くように、「誰もが自分らしい幸せな人生をまっとうできる世の中」を実現できるのではないかと考えてきた。「より良い世の中」への祈りを、微細ながら実行していくことが、私にとって放送の仕事の醍醐味になってきた。

しかし、またもや恥ずかしながら揺れるのである。もはや５０も半ばになって後輩にはとても言えないが、やっぱり揺れる。例えばこんな文章に出会ったとき。「社会全体の変革を考えるなんてこと自体『恵まれた階層』『驕ったインテリ』の発想なのですよ」。インテリという自覚はないが、それでもこの手の言葉に出会うたびにグサリと胸を刺されるようで、私はたじろぐ。「私は驕っているのだろうか」「世の中を変えようなどと思うのは傲慢なことなのだろうか」

だから放送人の会の先輩方に伺いたい。皆さんはこんな言葉の前で揺らいだことはありませんか、そのときどう考えたのですか、そして、私は驕っているのでしょうか、と。

古いメディア、テレビ

有馬　哲夫

昭和二十八年十月にこの世に生を受けた。自己紹介するとき「テレビ元年生まれだ」と言ってきた。その私がとうとう五十の大台を迎える。前に勤めていた大学で成人向けの開放講座を担当したとき、年配の方に「帝国大学の先生がテレビを教えるなどけしからん」と言われた。おそらく、大宅壮一の信奉者なのだろう。だが、映画のほうは、このときすでに東大などで「学問」として教えられていた。

テレビはやっと五十年たったところだが、「学問」として教室で教えられる資格が十分ある。もはや古いメディアになり、歴史に属しているからだ。

最初のころ、若々しく、チャレンジ精神と反骨精神（あるいは劣等感）にあふれていたテレビは、今や鼻持ちならない退嬰的、体制的、官僚的なメディアになってしまった。さまざまな既存のメディアからコンテンツと人材と活力を取り入れていたテレビは、ほかのニューメディアにこれらのものを吸い取られるようになってしまった。始まったときは、ほかの古いメディアを背景に登場してきたが、現在では、むしろ自分自身が背景に退いてしまった。

こういったことは、マクルーハンが今から四十年以上も前に予言していたことだ。そのことを『エッセンシャル・マクルーハン』の翻訳（ＮＴＴ出版七月予定）を通じて再確認した。テレビに限らず、メディアはある時点を越えると性質をまったく逆転させる。そして、古いメディアは、新しいメディアに道を譲り、歴史になり、芸術や学問の対象になる。

私の「テレビ研究ゼミ」で学んだ学生の多くは、テレビではなく、電話会社を目指す。かつてテレビを目指したような学生は、今は電話を目指す。だがそれは、メディア史でラジオの前に位置する電話ではなく、インターネットやブロードバンドの母胎としての電話である。今や電話は新しく、テレビは古いのだ。

（早大社会科学部教授）

未来のために

山路　家子

東風吹かば匂ひおこせよ……この歌の季節には、気象台にお勤めだったＹさんを想う。庭の梅の木を定点観測していると、毎年、東風の吹き始める将にその時に、梅の香が匂い立つのだと、先人の感性に感動なさっていた。

「人生読本」で御縁をいただいた方々を懐かしく想い、平和を祈る日々――だが嘆きの日々でもある。

例えばテレビのＢＧＭ、ひど過ぎないか。選曲もいい加減、音量も又。

最悪は、傾聴したい話や対談にまで音をかぶせる。何を考えているのだろう――考え無しに番組を流しているとしか思えない。ＢＧＭで使用する音楽著作権について論議されはじめた今、考える為にはいい機会ではないかしら。

携帯電話の使われ方も異常ではないか。電磁波の危険が叫ばれているのに、日常生活はもとより、テレビドラマでも、妊娠中の女性が大きなお腹にぴったりのポケットから携帯電話を取り出す。ぞっとする。脚本家は何を考えているのだろう。

銀行で腹を立てない人に会いたい。金利はゼロに等しいのに、窓口では申し訳ないという顔に出会ったことが無い。昨夏、冷房の余りの強さに注意したら、このビルの管理は当行ではないのですと。外気温との差があり過ぎて気分が悪くなったのだが客の健康など考えない。税金のお貰い、超低金利の犠牲者など無いかの様に、ＡＴＭの使用料？土地の値上がり待ち？考え無しも重症ね。

先人を想い、未来の為に祈ります。

列島発言

村上雅通（熊本放送）

私は今、入社当時在籍したラジオに思いを馳せているが、懐古趣味ではない。現状を打破する自らへのヒントを見つけるためだ。

売り上げの急激な落ち込みとデジタルに伴う先行き不透明感もあって、このところ制作環境は日増しに厳しくなっている。製作経費はもちろん、人件費の削減にまで及んできた。さらに売り上げ増加に奔走する営業からの要請企画も増えた。「ただでさえ低コストでやりくりしてきたのに、これ以上何を削れと言うんですか。制作意欲は減退するばかりです」

という若手制作者の訴えは高まっているが、私には彼らに適切な助言を与えることができない。そんな時思いおこしたのが、かつて経験したラジオ時代の制作環境だった。

朝の2時間ワイドが週2回、土曜日の4時間ワイド、30分の録音ものが2本、月～金の15分の帯番組、さらに月1回ペースで担当する公開収録もの、これが私の担当番組！　しかも一本当たりの制作費はせいぜい数千円。経費を浮かすため自分のバイクで取材に出向くこともしばしばであった。テレビとの制作環境の格差に不満をもちながらもそれでも私の制作意欲は前向きだった。限られた条件の中で何ができるかを、常に考えていた。有力歌手のキャンペーン情報をいち早くつかみ、公開収録を立ち上げ、中には出演料を派生させずに一万人規模のイベントを実現することもあった。映画の紹介番組では、当時、若手監督がその才能を開花させる登竜門となっていた日活ロマンポルノを推奨するキャンペーンを行い、遂には男の体臭漂う劇場で『女教師汚れた放課後』なるロマンポルノの〝女性だけの試写会〟を実地した。当時としては画期的企画として新聞にも取り上げられ、新規スポンサーも番組提供に加わったこともあった。

こうした企画の原動力となったのは、ラジオの特性を貪欲に捜し出そうとするハングリー精神だったように思う。ところがテレビに移って状況は一変した。制作費は数十倍に跳ね上がり、取材にバイクを使う必要もなくなった。それまで重大な決意を要した泊まり取材も日常茶飯事となった。ラジオの出身者にとって、数十万円という制作費は、まさに夢のまた夢であった。ところがテレビ制作の場が長くなればなるほど数十万円の制作費は「夢」から「通常のもの」となり、さらには「不満足なもの」へと変わっていった。そして、ラジオ時代のハングリー精神も次第に失せていった。多くの番組を抱え、「何をやりたいのか」ではなく、「どうすればこなせるのか」だけを考えた時期もあった。今でも時折、こうした思いが去来することがある。プロデューサーとして、若手制作者に何度も作り直しを命じてきた私だが、このところ躊躇することが増えた。自ら取材に出掛けた時も、「もうこれくらいで…」という誘惑に苛まれることも多くなったように思う。

そんな中、一本のVTRがRKB毎日放送から送られてきた。木村栄文氏が30年程前に制作したドキュメンタリー『苦界浄土』だ。木村氏の作品集を再放送するための権利処理を、水俣の事情に詳しい私に依頼してきたのだが、改めてVTRを見て驚愕した。具体的に表現はできないが、作品に私がこれまで作って来たテレビ番組にはない力強さがあったのだ。

木村氏はかつてこんなことを話してくださったことがある。「昔は給料も安かったし、遊ぶこともできなかったから番組作りに没頭したものです」。

私がラジオ時代を顧みるのは、そんな木村氏の言葉が蘇った直後のことからだ。そこでわずかに残る自作のラジオ作品を20年ぶりに聞き直した。作りに粗い部分もあるが『苦界浄土』に共通する力強さと制作当時のストレートな思いが伝わってきた。

あれから約二カ月、未だに後輩たちの嘆きに応える明確なメッセージは見つかっていない。ただ、業務命令通り仕事をこなしていれば、他の地場企業以上の給与が保障される「ぬるま湯」から抜け出さない限り、制作者の新たな展望は見つからない、そのことだけは確信した。

20数年前の自分を改めて見つめ直す今日このごろである。

放送界多頻語字典 抄

非凡社刊

ぶらさがり …赤絨毯で渦中の陣笠を囲み「先生、カネ貰ったんでしょ、違いますか」とマイクをつきだすが、狭い団地のわが家では3人のガキにぶらさがれ放っしのトホホ記者もいる。

別バラ …「ケーキは別腹よ」とは飽食ギャル。業界にも別腹はある。「面白いがG帯では数字がねえ」「なら別バラで様子をみようか」と使う。

「転」深夜枠のバラエティーのこと。マンマ… 愛子サマがお覚えになった最初の日本語「転」ホンヤさん立ち会いで台本がモメると、気の弱い演出家が「マンマでいこうや」と力なく折れるのがトンマな本読み室風景。

タック… 「源」帆船下隅の小横帆のこと「転」画面の隅でかこむ別枠小画面のこと「例」主画面は投手、タックでは一塁ランナーとか、バラエティーではゲストのバカ面をねらう画面処理「解」タックに向かってVサインするのは概して落ち目のタレントである。

プロジェクトH… 深夜バラエティーで没になった企画の題名。某3流プロの社長は、いまだに悔しがってる。

鳴く… 「○○ちゃん、そこで鳴いて」とD。「ネコ？犬？」「サカリのついた猫だ」で音効サンが鼻に皺を作ってひと鳴き。ADはLPに針を乗せるとRはヒューン「しまった！泣いた」頭出しの失敗。お局アナにいびられた新人女子アナが給湯室でさめざめと「泣く」。放送局とはナキモノだね。

（蔦蛾蝶）

某月某日　現場発

金平　茂紀

アッセイニクルシム　イラクノヒトビトヲ…

もう6年も前のことだ。当時担当していた番組で、スタジオ討論に参加した高校生が発した言葉があった。

「なぜ人を殺してはいけないんですか？」。今、アメリカのブッシュ政権をウォッチする仕事でワシントンにいる。私はあの高校生が発した問いに答えるすべを知らない。人を殺してもいいとされている3つのケースがある。正当防衛、死刑、そして戦争である。

アメリカに戦死者が出て、大統領は、今朝、夫人と共に教会で神に祈りを捧げたという。ただしあらゆる戦争の犠牲者たちのためではなく、有志連合（アメリカ及び共に参戦する連合国）の犠牲者のために祈ったのだ、と記者たちの前でそう語った。我々と奴ら。敵と味方。正義と邪悪。かくも単純な二分法で私たちの世界は二分される。

「われわれの側につくのか、テロリストの側につくのか。今後、世界の国々は決めなければならない」（9月11日の同時テロ事件後の大統領の議会演説）。イラク側の捕虜映像を流したアルジャジーラという中東の放送局について「HOSTILE MEDIA」（敵対メディア）という言葉も、今日の記者会見では聞かれた。「われわれの側につくのか、奴らの側につくのか。世界のメディアは決めなければならない」。近々、そのような声を発する指導者が現れるかもしれない。これはジョージ・オーエルの小説の中の出来事ではない。今、現に、目の前で起きていることどもだ。このワシントンでも見ることの出来る日本の某放送局のニュースの中で、こんな言葉が闘こえてきた。「アッセイニクルシムイラクノヒトビトヲカイホウスルタメニ…」

◇　◇　◇

今、目の前で起きていることは紛れもなく実際の戦闘だ。カメラの向こう側に写っているのは確かにイラク側の陣地だ。コンクリート壁に身を潜めて対峙するイギリス兵の真後ろで、スカイニュースの「従軍」特派員の生中継リポートがちょっと前から始まっている。CNNやFOX、MSNBCなどのニュースチャンネルはみなこの生映像を放送し始めた。CNNのアロン・ブラウンが興奮してコメントしている。

「まるでリアリティ・テレビを見てるみたいだ。戦争ジャーナリズムのなかでこんなことはかつてなかった。HISTORICAL MOMENT」（歴史的瞬間）だ」と。

そうに違いない。戦争報道の極限に近づきつつあるのだ。近未来戦争では、明らかに情報特殊部隊が登場するだろう。兵士たちが担いでいるのは銃器ではなく、小型の自動追尾アンテナ付きの超小型軽量ビデオカメラ（暗視装置付）だ。リビングルームにいる視聴者たちは、そう、まるでリアリティショーのようなリアリティを楽しむことになるのだ。だが、そのようなことが実現してしまった時、果たしてそれは、まだメディア（媒体）なのだろうか？

また、ニュースのなかで、こんな言葉が聞こえてきた。「今日もあのNOISYな（うるさいったらありゃしない）反戦プロテスターが集まっています（CNN人気キャスター、ポーラ・ザーンの発言）。

私はアメリカのすばらしいテレビ番組をいくつも見た。マイケル・ムーアの《BOWLING FOR COLUMBINE》はアカデミー賞まで奪ってしまった。もっとも、彼の受賞後の挨拶はブーイングの嵐だったが。

こんな声が聞こえてきた。

「奴は狂っている。アカデミー賞の受賞演説で反戦を訴えやがった」

◇　◇　◇

オハイオ州デートンにあるアメリカ空軍博物館は一見の価値がある。そこに展示されているB－29を見よ。その説明書きをきちんと胸に刻んでおこう。ヒロシマ、ナガサキに原爆を投下して第二次大戦を終わらせ、予想された連合国側の被害者の増大を防いだ英雄として展示されている。ヒロシマ、ナガサキで一瞬にして、かの同時テロ事件の死者3000人の数十倍の死者がもたらされたことを、この国の人びとはどうしても認めようとはしない。

◇　◇　◇

ただ、わたしは希望を失ってはいない。「こんなことが続いていいわけはないじゃないですか？」そう言って東京から電話をかけてきた君は、ニッポンの中でも息苦しそうだが、夜中に卓球なんぞをやって、カラオケでビートルズを歌っているそうじゃないか。星条旗とGOOD BLESS AMERICAが流れ続けるアメリカより、かなり「自由」かもしれないね。

（TBS ワシントン支局長）

本会報の無断転載をお断りします

編集後記

◆新春号の《放送人アンケート》で不手際がありました。楠見　昌さんを楠　見昌とし、土居原作郎さんを土井原と誤記。申し訳ありません。ちなみに土居原さんの土には　、が入ります為念◆その昔、團伊玖磨は團を団と記す新聞社に「おれは団子ではない」と抗議し、山田耕筰は耕作と書く誤記封書は「余は田吾作に非ず」と片っ端から屑籠へ放り込んだ由◆松尾「オレだって羊一が洋一にされてる。サンズイを修正液で消してる良心的な手紙もあるが、それだと羊が痩せてるのだ」雅浩「肥満体質への忠告だと思いなさい」◆誤記ではないが教養番組の座談会「都市と犯罪」で岩井弘融教授に『事件記者』で売れっ子の島田一男氏を起用した（はずだった）。録音の進行がどうもおかしい。聖心女子大の心理学者島田一男教授が出演しているではないか。「座談会は少々コ難しくなったが、ま、いいか」と某プロデューサー。某局ではいまだに語り草だ◆文芸評論家久保田正文氏（故人）と宗教学者の久保田正文立正大学教授はご近所同士。誤配は慣れっこだが、こと原稿料の誤配だと話は違う。執筆テーマが似てる場合だとご両人で照合しあったとか。◆小田切成明と小田切正明の作品はどっちがどっちの演出か混乱してしまうのは私だけだろうか。たかが人名、されど人名、と痛感した次第。（松尾）